

学校教育目標：「向学 自主 協働」

校訓：「夢を実現」



川通中だより

令和6年8月28日 第5号

さいたま市立川通中学校

TEL 048(799)1061

川中キャラクター ホームページ



かめたろう



～スローガン：「一生懸命はかっこいい」～

## 私たちにできる最善の備えを

校長 鈴木 純

例年にない猛暑日を更新した今年の夏、8月21日、学校への出勤時、いつもなら暑くてエアコンをかけて車を走らせているのですが、この日は久しぶりに涼しく、窓を開けて走らせていました。すると、窓の外からは、ツクツクボウシが夏の終わりを知らせるかの如く勢いよく鳴いている中に、コオロギなどの虫が負けずに合唱しており、いよいよ「秋の気配」というよりも「夏休みがもうすぐ終わりだな」と感慨深く感じながら出勤したところでした。

さて、今夏は、本校においては、男女ソフトテニス、剣道女子、新体操の県大会、文化部では、吹奏楽部の地区大会などがあり、夏休みの前半も生徒の活躍が見られました。国内外では、定番の高校野球での各校の熱い戦いが現在も続いています。4年に一度のオリンピックでは、様々なドラマが生まれ、特にSNSを通じた誹謗中傷の話題が多く感じられました。そして、突然の宮崎県の震度6弱の地震など、南海トラフ地震が心配される所々です。また、9月は過去に関東大震災が起きています。本校では昨年度より、学校安全（防災・交通安全等）について、研究をしているところですが、あらためて、防災への意識を高めていきたいです。

ところで、ネットニュースを見ていたら、みなさんに知らせておきたい記事がありましたのでお知らせします。

（8月20日、withnewsより）

「設置されていて当たり前」の存在になった AED（自動体外式除細動器）。医療従事者ではない一般市民が使えるようになって、20年が経ちました。これまでに市民が AED を使って救った命は 8000 人を超えます。17 年前、高校野球の試合中に強い打球を胸に受けて心肺停止になった男性は、周囲の救命処置などによって一命を取り留めました。「がんばれ！ 生きろ！」。当時、救命に使われた AED には録音機能があり、緊迫した様子が収められていました。男性はいま、警備会社の社員として、AED の普及活動に力を入れています。

2007年4月30日、高校野球の春季大阪大会。当時、飛翔館高校（現・近畿大学泉州高校）2年生の上野貴寛（たかひろ）さん（33）＝大阪市在住＝は、投手としてグラウンドに立っていました。記憶が残っているのは、3回表まで。対戦校の打者の強烈なライナーを左胸に受け、ボールを追いかけようと2、3歩足を進めたところで意識を失いました。ふらつき、「ドスン」という音とともに仰向けに倒れ込んだ上野さん。観客席で応援していた母親の愛美さんは「痛そうだな」と心配になったものの、「スポーツでケガをすることはあるから」と見守っていました。しかし、上野さんはなかなか立ち上がりません。審判や監督が駆け寄って異変に気づき、「親御さんはいらっしゃいますか？」と呼びかけました。愛美さんは「そこで初めて、大変なことが起きていると認識した」といいます。救急車が来るまでの間、監督が胸骨圧迫（心臓マッサージ）、父親が人工呼吸を続けました。たまたま観戦に来ていた地元消防署の救急救命士が、学校のロビーに設置されていた AED で救命処置をしました。AED はその1年前に卒業生から寄贈されたものだったといえます。

「ウエーオーー！」「タカ、タカ！」「起きてくれよ！」「がんばれ！」「生きろ！」 家族や監督、チームメイトが必死に叫び続けました。その騒然とした様子は、AED に記録されています。AED は、素肌に電極パッドを貼ると心電図を測り、電気ショックが必要かどうか自動で判断してくれます。上野さんにパッドが貼られ、「ショックが必要です」「ボタンを押してください」などとガイダンスが流れましたが、泣き叫ぶ声にかき消されて聞き取ることができない状況でした。1度、電気ショックのタイミングを逃してしまいましたが、2度目の解析で実行しました。AED は初回の心電図自動診断、充電、ショック指示のあと、一定時間が過ぎると放電し、次の指示は2分後に行われるように設計されているそうです。電気ショックを与えられ、呼吸が戻った上野さん。AED の音声には「生きてます！」という救急救命士の声も残っていました。上野さんが意識を取り戻したのは、病院に搬送される救急車の中でした。「苦しくて血を吐きました。でもそのときの記憶もあいまいで、『救急車の中や……』『苦しい』と思ったくらいでした」数時間後には話をできる状態となり、「腹減った」と話していたそうです。10日ほどで退院し、後遺症はなく、1週間後には部活に復帰できたといえます。

AED の音声は退院後に自宅で聞き、涙しました。「言葉が出ませんでした。僕自身は記憶がないので、何があったか分からない。みんなめっちゃ泣いてるやん、って」「自分としてははいたことではないと思っていましたが、想像をはるかに超える壮絶なものであったことが分かりました」あとから確認したところ、電気ショックを与えられたのは倒れてから8分半後だったといえます。心臓が止まってしまった場合、1分経つごとに救命率は約10%ずつ低下すると言われていました。居合わせた人によって心臓マッサージを続けられることで救命率は約2倍、AED の使用では約4倍になるそうです。

いま、上野さんは総合警備保障（ALSOK）の営業担当として働いています。「僕を救ってくれた AED を販売していた会社です。AED を普及していきたい気持ちがあり、いまの会社に決めました」自身も AED の販売や操作説明、一次救命講習会に携わります。そのとき、「実は僕、AED を使ってもらって助かったんです」と話すそうです。「経験者の僕だからこそ伝えられることがある」と考え、AED の設置を多くの人に呼びかけます。「AED は耐用年数が6～8年で、置いていても使うことがないケースもあるかもしれませんが、しかし、社会貢献として考えてほしいと思います。身近な人に起きたらと想像して、いざというときのために導入してほしいです」

本校には、さいたま市からの AED が職員室前に、PTA からの AED が体育館入り口に、そして、市内の企業寄贈による AED が校門前に設置してあります。有事の時は一番近いところの AED を取りに行き、一刻でも早く、かけがえのない大切な命が助かるよう、私たちにできる最善のことをしていきましょう。